

ミステリ読書案内

2023. 2. 8 発行元

第445号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

チャンドラーの代表作

私が「一番好きな作家は？」と聞かれた時にあげるのがレイモンド・チャンドラー。これまでも繰り返し取り上げてきた。今回は「代表作」。すべての作品が代表作のような気持ちになっているのだが…。

全てが「代表作」

作品数が多くないので、すべてが「代表作」だと言っているような感じがしている。長編は『長いお別れ』『さらば愛しき女よ』を選んだ。私の好みの順番通り。でも、他の長編の『大なる眠り』『高い窓』『湖中の女』『かわいい女』『プレイバック』、いずれも全部「代表作」。(『ブードル・スプリングス物語』は未完で残されたものをロバート・B・パーカーが続きを書いて完成させた)

長編作品がたったこれだけで、他にないということが非常に残念だ。「いつまでも読み続けたい」と思わ

せる力がチャンドラー作品には詰まっていると思う。

いつも同じようなことを書くのだが、若い人たちにちょっと古い時代のミステリを是非読んでほしいのだ。今、日本も世界もあまり流れが良い方向に行っているとは思えないのだ。地球温暖化の話だって、ここ数年のコロナ禍の話だって、そしてロシアによるウクライナ侵攻だって、人類が知恵を集めて乗り越えていかなければならない出来事だと思うのだ。一部の人や一部の国家だけの損得の発想では駄目だと思う。ミステリだって多くの人々の幸福を願うものであってほしい。

NO.3「チャンドラー傑作集1」

1933年～1950年にかけてパルプマガジンなどに掲載された作品を集めた本。チャンドラーの短編集として一番まとまっているのは創元推理文庫の『チャンドラー傑作集1～4』だと思う。本書には4編収録。『脅迫者は射たない』の探偵の名前はジョン・マロリーになっているが、フィリップ・マーロウと同じと考えてよい。『金魚』と『赤い風』は本書ではマーロウの名前に直してある。雑誌掲載時は別の名前だったそうである。最後の一篇は『山には犯罪なし』である。ハヤカワ版のチャンドラー作品は清水俊二の訳。創元版は稲葉明雄の訳である。私の手元にある本は使用してある紙のせいだと思うのだが、茶色に変色しつつあるようだ。

NO.1「長いお別れ」

1954年。長編第六作。村上春樹訳で言うと『ロンググッドバイ』。「ギムレットにはまだ早すぎるね」など、名言の山。私の手元にあるのは昭和50年(1975年)のハヤカワ・ポケットミステリ第11版。繰り返し読んでいたので、背の部分が弱くなってしまった。

フィリップ・マーロウとテリー・レノックスの物語である。最初の出会いは、高級料理店の前に止まったロールスロイスに半分乗りかかった、酔いつぶれた姿だった。運転席に座っていた若い女は、レノックスをマーロウに預けると知らんぷりをして出発していった。マーロウは自宅に彼を担ぎ込み面倒をみた。二度目の出会いは空腹のまま行き倒れになりそうになって、警察に連れていかれそうになる直前。マーロウは彼を助け上げ、食事の世話をすることに。一文無しになっても言動はとても丁寧だった。その後、レノックスからお礼の小切手と手紙が届いた。「シルヴィアとぼくは二度目の新婚旅行にでかける」とのこと。シルヴィアとは大金持ちのハーラン・ポッターの末娘。それで治まりそうにも見えたのだが…。ある日、マーロウの前にレノックスは拳銃を持って現れ、メキシコ行きの飛行機に乗せてくれるように頼む。シルヴィアが死体で発見されたのだ。

No.2「さらば愛しき女よ」

1940年。『大なる眠り』に続く長編第二作に当たる。村上春樹訳で言うと『さよなら、愛しい人』。学生時代の1976年に二度目の映画化になったものも見に行った。フィリップ・マーロウの役をロバート・ミッチャムが演じていた。思い出深い作品。

冒頭から緊張感が一気に高まる。マーロウはセントラル街で依頼された仕事をこなしている途中で、大きな手で酒場の中に引っ張りこまれた。大きな手の持ち主は「大鹿マロイ」と名乗り、「ヴェルマはどこにいる？」と用心棒に訊ねた。用心棒はいきなりマロイの顎を殴りつけた。しかし、大男マロイは一インチ頭を動かしただけで、用心棒を掴み部屋の隅に投げ飛ばした。用心棒はデンヴァーまで聞こえそうな音をたてて衝突して動かなくなった。大男はバーテンダーに八年前のことを聞く。ナイトクラブ・フロリアンで歌手をやっていたヴェルマという女のことを。奥の部屋に店の大将のモンゴメリーがいると聞き、マロイはその部屋に入っていく。そして、鈍い音が聞こえてくる。コルトを構えて部屋から出てきたマロイは、モンゴメリーが銃を持ち出したことを告げて立ち去った。死体を二つ残して。マーロウは警察に報告した後、自分でヴェルマを探すことに。